

西水 美恵子

にしみず・みえこ—75年ジョンズ・ホプキンス大学院卒、プリンストン大経済学助教授を経て、世銀副総裁。退任後、シンクタンク・ソフィアバンクのパートナーなどを務める。



世界経済の軸となる可能性を持つインドに、企業の関心が高まりつつある。インドに限らず、企業の海外進出やグローバル戦略は政治リスクを見極めねばなるまい。そのリスクを考える時、インド建国の父ガンジーの心配を

想う。

インドの政治史は異民族間の葛藤の歴史。世の偏見に人生の可能性を拘束される少数民族やカーストは、その落し子だ。根強い差別と同居する経済的格差は、彼らの極貧脱出を拒み、親から子へ、そのまた子へと積もり重なる鬱憤を生み、いつかどこかで爆発しかねない。ガンジーは、多民族国家インドの政治リスクをそこに見た。だからこそ、ガンジーは、命あ

ウェーブ 時評

2010. 6. 10

る者全てに優しくと説き、人間は皆平等と教え、非暴力・不服従を独立運動の術としたのだろう。インド・パキスタンの分離を許す独立案にも、ヒンズー対イスラムの宗教差別を安易に正当化するのみに大反対をした。「人民の多様性を美しい和に織りあげて国家の富に」と論しながら、ヒンズー原理主義者の刺客に倒れた。

赤い回廊と建国の父

ガンジーの意を汲んだネルー初代首相は、民族の境界線を各州の境にせぬよう奮闘し、一応成功を得た。しかしガンジーの心配事は立ち消えず、州の分割が様々な連邦脱退運動の懐柔手段になってしまった。州の数は民族言語の境界線に沿って倍増し、建国の父の努力は今も風化し続ける。

彼らの属する活動は、1967年、インド北西部、西ベンガル州貧村での土地争いに始まった。インド共産党の極左派が、大地主の権力乱用に泣く農民を庇護しようと暴動を起こし、「上流階級が牛耳る政府」打倒を目的とする反政府武装活動へと発展していった。活動は、インドでも最も貧しい地域、特に根強い差別扱いを受け

したが、事実カラシニコフ自動小銃を無造作に抱く「革命闘士」に護衛される日々だった。マオイスト(共産党毛沢東主義派)を中心とした様々な極左思想活動地下組織の若者たちだった。「私を誰から守っているのかな。そっだ、人民を世銀から守っているのじゃう」と、軽口をたたいては彼らを困らせ、笑わせた。

る先住民や、カースト制の底辺 Hunt(作戦・緑の狩猟)が、赤い回廊の攻勢を開始した。

赤い回廊の草の根で「人民を世銀から」守ってくれた若者らは、目を輝かせてガンジーの逸話を語ってくれた。民の敬愛を一身に集め、国家のハートを司ってきた建国の父。ガンジーの生と死の教えは、民族や、カースト、イデオロギーを超えてインド人の心に生き、彼の案じた政治リスクを管理し続けると、信じたい……。